

白石市

もうひとつの白石を訪ねる

白石市



起源

二つの白石のつながりは、明治維新のころまでさかのぼります。

戊辰戦争

明治元年（1868年）、戊辰戦争で明治政府に敗れた仙台藩は、領地を三分の一に減らされました。

これにより、藩の重臣で白石領（現在の白石市）の領主であった片倉小十郎邦憲が治めていた領地や屋敷などは全て没収され、家臣とその家族7千400人あまりが路頭に迷います。

北海道への移住

生活の糧を失った片倉家は、明治政府が進めていた蝦夷地（現在の北海道）開拓の移民計画に応じることを決意。一部の人々が胆振国幌別郡（現在の登別市）へ移住します。

しかし、旅費の調達をはじめ当面の生活費一切が自費とされたこの移住は、困難を極めるものでした。そのため、片倉家旧家老の佐藤孝郷は、再三政府に窮状を訴え、渡航費用などの援助を求めます。

これが功を奏し、移住者の受け入れを北海道開拓使の直轄事業としていた政府は、旧領に待機していた600人あまりを「開拓使貫属」に任命、費用などの援助を決めました。

こうして、孝郷率いる一行は2隻の船で北海道へ出発。先に出航した咸臨丸が木古内沖で座礁するという災難に見舞われますが、後発の庚午丸に乗り換え、明治4年10月、小樽に到着します。



▲咸臨丸のモニュメント（木古内町サラキ岬）

白石村の誕生

開拓使との交渉を経て、孝郷らは、現在の白石区の望月寒川流域を入植地と定めます。寒風吹きすさぶ中での

開墾作業は想像を絶するものでしたが、現在の国道12号沿い、白石公園（菊水上町1条3丁目）付近から白石神社（本通14丁目北）までの間に住まいを短期間で完成させます。開拓使判官の岩村通俊は、その奮闘ぶりをたたえ、孝郷らの郷里「白石」の名を取ってその地を「白石村」とすることを認めました。

白石村は、昭和25年に札幌市と合併。そして、昭和47年に市が政令指定都市となるのに伴って「白石区」が誕生したのです。

※注釈

- ・戊辰戦争：明治元年（明治2年）明治新政府が江戸幕府勢力を一掃した内戦。
- ・佐藤孝郷：片倉家旧家老。白石村開拓の功績をたたえ、白石小学校に記念碑が建立されている。
- ・北海道開拓使：北方開拓のため明治2年から明治15年まで設置された官庁。
- ・開拓使貫属：土族の身分を失わず開拓使に所属して北海道の防備と開拓に従事した人。
- ・岩村通俊：北海道庁初代長官。明治4年、北海道開拓使判官として札幌の開墾に当たり、北海道庁設置の必要性を政府に訴えた。

